

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	サバティーニ教授の『イタリア語文法講義』ノート
Author(s)	古浦, 敏生
Citation	ニダバ, 19 : 86 - 90
Issue Date	1990-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00044725
Right	
Relation	



サバティーニ教授の 『イタリア語文法講義』ノート

古 浦 敏 生

ローマ大学教育学部教授、Francesco Sabatini先生は、古イタリア語文献学者として名高い Alfredo Schiaffini 教授 (1895-1971)の愛弟子として、「イタリア語史」、「イタリア語文法」、「イタリア語教授法」等の講義・演習を担当しておられる。先生には『言語と語法』1980、『コミュニケーションと言語使用—イタリア語の実践・分析・歴史—』1984等の御著書のほか、数多くのイタリア語史・方言学関係の論文がある。筆者は、1987年11月より翌年6月までのこれらの授業に参加することができた。そして、『ニダバ』第18号には「サバティーニ教授の『イタリア語史講義』ノート」と題する報告をさせていただいた。本稿はその続編である。(なお「イタリア語教授法」は、イタリア人教師がイタリア人の小・中学生にイタリア語を教える際のテクニックについての講義であって、例えば、品詞に関しては、冠詞・名詞・代名詞・形容詞・動詞の順か、或は、名詞・冠詞・代名詞・形容詞・動詞の順で教えるのが良い、といった内容であった。これは筆者の専門外のこととて、本稿ではこれ以上触れないことにする。)

「イタリア語文法講義」は「イタリア語史講義」と異なり、一年を通じて必ずしも一貫したのではなく、一回毎に完結するケースが多かった。従って、それらの内容を順を追って記述していくと、前後の脈絡のとれないものとなりそうである。そこで、講義内容の主なものを私なりにピックアップ・分類し、まとめることとした。

§1 言語の多様性について

言語を記述する際、まず文語と口語の差を考慮せねばならない。A me mi piace. 「私にはとても気に入っている」(直訳:「私にとって、私には気に入っている」)のような会話文における表現性 (espressività) を無視してはならない。

言語 (lingua) と方言 (dialetto) との間には様々な段階が存在し、両者の間に明確な一線を引くことはむつかしい。このような不明確さ (incertezza) は、言語の種々のレベルにも現われている。例えば、語彙のレベルでは、egli: lui (いずれも人称代名詞 3人称男性単数主格形)、fuggire: scappare (いずれも「逃げる」の意) の使用にゆれが見られるし、統語論のレベルにおいても、gente「人々」のような集合名詞が主語に立つ場

合、それに呼応する動詞の数にゆれが現われる。けれども、この *incertezza* は徐々により大きな安全性 (*maggior sicurezza*) へと向って行くものである。

§2 音について

音素のレベル (*livello fonologico*) に関する例として、子音結合 *-ns-* を取り挙げてみよう。ラテン語では可能だったこの *-ns-* は、イタリア語への推移の過程で *-n-* が消失し、*-s-* となった。eg. *lat. mensis* 「一ヶ月」 > *ital. mese*, *lat. pensare* 「重さをはかる」 > *ital. pesare*。但し、*-ns-* の直後にほかの子音が続く場合は、*-n-* は保たれた。eg. *ital. instabile* 「不安定な」、*insperato* 「意外な」。しかし、このルールに関しても例外があって、*in+sp-* または *in+st-* の場合は *-i-* が挿入された。*in* 「Ispagna」 「スペインでは」、*in* *istrada* 「道路に」を参照。

トスカーナ地方では、語末が *-l*, *-m*, *-n*, *-r* 以外の子音で終わることが極力避けられる。その結果、外来語の *sport* 「スポーツ」も *sporte* とされることがある。

§3 語彙について

同じ語形でありながら、名詞にも動詞にもなりうるものが在る。eg. *cena* 「夕食；彼は夕食を取る」、*pranzo* 「昼食；私は昼食を取る」、*ritorno* 「帰還；私は帰る」、*viaggio* 「旅行；私は旅行をする」など。また、eg. *aereo* 「飛行機；空の」のように、名詞にも形容詞にもなりうる語も存在する。

外国語からの語彙の借用（取り入れ方）に関して言えば、それは言語によってまちまちである。ドイツ語には翻訳借用が多く（例えば、英語の *television* は *Fernsehen* として借用される）、スペイン語にはそのままの形での取り入れ方が多い (eg. *televisión*)。イタリア語は（スペイン語ほどではないが）そのままの形で採用しようとする傾向がある (eg. *televisione*)。

§4 品詞について

(1) 代名詞

ラテン語から俗ラテン語を経てイタリア語に至る 3人称の人称代名詞の推移について、次ページの表のようにまとめてみよう。

この表に関して少し注を付しておく、*egli*, *ella* と並んで *lui*, *lei* が主格としても用いられ、競合するようになったのは1400年頃からのことであるが、その理由は定かでない。言語行為は主観的 (*soggettivo*) であり、抽象的 (*astratto*) であり、しかも多様 (*vario*) である。属格の *illius* が *illuius* となったのは、関係代名詞の属格形 *cuius* への類推であろう。ラテン語の中性の *illud* などは消失した。なお、主格の *egli*, *ella* と属格の *lui*, *lei* は強形、その他の *gli*, *lo*, *le*, *la* は弱形である。

格	男性			女性		
	lat.	俗lat.	ital.	lat.	俗lat.	ital.
主格	ille		egli	illa		ella
属格	illius	illuius	lui	illius	illeius	lei
与格	illi		gli	illi		gli, le
対格	illum		lo	illam		la

指示代名詞について一言述べると、questo「これ」は話者(parlante)の近くに在るものを、codesto「それ」は聴者(ascoltante)の近くに在るものを、quello「あれ」は第三者の近くに在るものをそれぞれ示す。このcodestoは、現代イタリア語では消滅の一途を辿っているが、官僚的(burocratico)な表現としてのトスカーナ文語やラツィオ州のチョチャリーア地方では保持されている。

双数(duale)は、イタリア語では noi due「われわれ二人」、voi due「君達二人」によって表わされる。

(2) 形容詞

数学では数を限定的に扱うことが可能だが、言語学では必ずしもそうはいかない。不定形容詞を含む次の四つの表現がそれを如実に物語っている。eg. alcuni amici「若干の友達」、parecchi amici「多くの友達」、pochi amici「僅かな友達」、troppi amici「あまりにも多くの友達」において、それぞれの友達の人数を限定するのはむづかしい。

関連形容詞(aggettivo relazionale)とは、「前置詞 di + 名詞」によって置き換え可能な形容詞のことである。lunale「月の」、postale「郵便の」、terrestre「大地の」を参照。これらは di luna, di posta, di terraとそれぞれ同価である。

(3) 動詞—名詞との対比も含めて—

amare「愛する」のような規則変化動詞の活用形は、sono stato amato「私(男性)は愛された」、sono stata amata「私(女性)は愛された」、など、法・時称・人称・数・性のすべてに亘って、あらゆる変化の可能性を考慮すると、なんと 292 の変化形が存在することになる。名詞は、動詞と比べれば、語形変化は少ないが、意味的には動詞よりも豊かである。

動詞と名詞が、その意味内容において、同一となるケースがある。

eg. amare 「愛すること」 : amore 「愛」

leggere 「読むこと」 : lettura 「読書」

mangiare 「食べること」 : pranzo 「食事」

次に、近過去と遠過去との差を具体的に示してみよう。

① Io ho conosciuto Rosanna.

② Io conobbi Rosanna.

①は近過去の用例であって、「私はロザンナと知り合った。(そして、彼女は今も私の妻である)」という意味である。②は遠過去の用例であって、「私はかつてロザンナと知り合った。(ただそれだけのことである)」という意味である。要するに、近過去は過去における行為・状態の結果が現在まで色濃く残っているものであり、遠過去は現在とは全く関係の無いものである。

pentirsi 「後悔する」、vergognarsi 「恥じる」は代名動詞と言われ、常に代名小詞を伴った活用をする。eg. Io mi pento. 「私は後悔する」、Io mi vergogno. 「私は恥じる」。さて、代名動詞と、その代名動詞から代名小詞を除去した形態の動詞とが同じ意味になるという特殊なケースが存在する。eg. ribellarsi : ribellare (いずれも「反乱を起こす」の意)。

ギリシア語に存在した中動相 (forma media)は、ラテン語では deponentia として現われる。eg. morior 「死ぬ」、nascor 「生れる」、utor 「使う」。これらの名残は古イタリア語に見られる。eg. morirsi 「死ぬ」、nascersi 「生れる」、servirsi 「使う、利用する」、pronunziarsi 「自分の意見を述べる」など。

mangiare 「食べる」は、この動詞の持っている主体性 (sogettività) 故に、受動形では現われにくい。従って、Maccheroni sono mangiati da me. 「マカロニは私によって食べられた」のような文は、形式的には可能であるが、現実には耳にすることはしない。

§5 語順とイントネーションについて

次の三つの文を比較してみよう。

① Ho bevuto il caffè. (直訳: 「私は飲んだ、コーヒーを」)

② Il caffè l'ho bevuto. (直訳: 「コーヒーを、それを、私は飲んだ」)

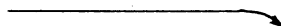
③ L'ho bevuto il caffè. (直訳: 「それを、私は飲んだ、コーヒーを」)

これらはいずれも「私はコーヒーを飲んだ」の意であるが、そのニュアンスはやや異なる。平叙文①におけるil caffèは初出のものである。従って「私は飲んだ」よりも「コーヒーを」の方に力点が在る。これに対して、目的語を文頭に移動させ、指示代名詞でそれを受けた重叙表現文②におけるil caffèは、tema(topic) であって既知 (già noto) である。従って、「コーヒーなら私は飲んだ」の意であって、l'ho bevuto 「私はそれを飲んだ」というremaの方に力点が在る。③は、目的格の指示代名詞が文頭に現われ、それに呼

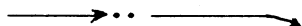
応する真の目的語が述語の後に置かれる構文で、右方転位 (dislocazione a destra) と呼ばれる。③において、bevutoとil caffèとの間には、②におけるil caffèとl'hoとの間よりもやや長い休止が置かれる。そして、③における il caffè のイントネーションは②における il caffè のそれよりもやや低い。なお、temaとしては、②の方が③よりも強い。

叙上の①②③のほか、「君はコーヒーを飲みましたか？」の意を表わす二つの疑問文（このうち⑤は③に対応する重叙表現文）を加え、それらのイントネーションを「直線と矢印（発話の連続的な流れとその方向を示す）」と「点線（発話の中断・ポーズを示す）」とで表わしてみよう。

① Ho bevuto il caffè.



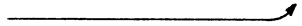
② Il caffè l'ho bevuto.



③ L'ho bevuto il caffè.



④ Hai bevuto il caffè?



⑤ L'hai bevuto il caffè?



なお、⑤のil caffèの末尾のイントネーションは、耳で聞いた限りでは平板調である。しかし、この所をサウンド・スペクトログラフで観察すると、小さな上昇が見られるそうである。

最後に、本稿を終えるにあたり、暖かい御指導を頂いたサバティーニ教授に厚く御礼申し上げます。